

健康文化

高校のクラス会

前越 久

私は昭和29年3月に愛知県立愛知工業高等学校機械科を卒業した。明治34(1901)年創立で愛知県下でも最も古い伝統のある工業高校である。平成12(2000)年10月1日に創立100周年記念式典が愛知芸術文化センターにおいて挙行された。通称“愛工”と呼ばれ親しまれてきた。帽子の徽章は円形をした緑色を背景に白色で“愛”の文字がデザインされており、今、NHKの日曜日大河ドラマ、直江兼続の兜の“愛”の文字とは異なり、こちらはこちらで趣きのある書体である。現在の高校生はなぜか帽子なるものはかぶっていないが、当時はどこの高校生も、徽章のついた鍔付きの黒い帽子をかぶっていた。それで、徽章を見ればどこの高校生であるかはすぐに分かったものである。愛工には、機械、電気、建築、土木、工業化学、紡織、図案の7つの過程があった。当時は普通科の高校は学区制であったが、愛工は愛知県下のどこからでも受験することができたので、競争率も高く、クラスメイトはプライドを持っていたように思う。図案科には数名の女子学生が在籍していたが、他の過程はすべて男子学生ばかりであった。故杉本健吉画伯は愛工図案科の卒業生である。2～3年の授業科目では、記憶も薄らいでおり定かではないが、機械設計、内燃機関、原動機、材料力学、機械製図などがあり、実習ではバイスに金属片を固定しヤスリで表面仕上げをすることから始まり、鍛造、旋盤、フライス盤、セーパーなどの工作機械を操作して簡単な金属部品の製作を指導された。木型を土に埋め込んでそれをそーっと抜き取り、そこへ溶鉱炉から鉄の湯を流し込む鑄造の実習もやった覚えがある。現在の愛工は、電子機械科、電気科、情報技術科、建設科、化学工業科、デザイン科を置き、女子学生も3学年合わせて100名以上在籍しているようである。

私にとって後になって最も役に立った技術は製図であったかもしれない。現在では、機械製図、建築図面などはコンピューターで簡単にしかもきれいに短時間で描きあげられるようになったが、昭和30年代頃は手書きが主流であったように思う。製図器の中には大小のコンパス等の他にカラスロが何本も入っていた。金属製で‘鳥の嘴’に似たペンで、小さなねじを回すことによってカラ

スロの先端の開き具合を微調節することにより線の太さを変える機構を有したものである。カラスロの先端部のスペースに製図用の黒インクを少量注入して定規を当てながら、実線、破線、一点鎖線などを描く技術を習得していた。また、曲線は雲形定規を使用したり、首ふり機構のカラスロを用いてフリーハンドで器用に描く技術も有しており、このような技術を持つ者は、私が関係した医学系の社会の中には誰も居なかったように思う。私が尊敬する名古屋大学医学部放射線医学教室の初代教授であり、文化勲章受章者でもある今は亡き高橋信次先生の幾多の著書の中で、私がカラスロで描いた挿絵が何十枚も現在でも生き続けていることは私の宝でもある。

自慢話めいた聊か長い前置き、何卒ご容赦願いたい。今年、高校のクラス会の幹事長を仰せつかったので色々と計画を練っているところである。殆んどのクラスメイトは退職してフリーターであるので土、日、を避け、10月下旬の水、木、の一泊二日を計画した。幹事長として一番気になることは出席者の人数である。卒業時は44名（在学中に1名が死亡）のクラスメイトであったが、現在では38名になってしまった。卒業後6名が亡くなっている。年齢70歳を過ぎると、脳梗塞で手足が不自由になったり、糖尿病や椎間板ヘルニア、あるいは膝関節痛で歩行困難な者、大動脈解離で治療中の者、その他体調不良などの理由で欠席の通知が届くと淋しくなる。出席者を20名確保することは至難の技となってきたからである。

私自身もあまり人のことは言えず、今年に入って1月には風邪をひきX線写真により右下肺野が肺炎を起こしているということで抗生物質を投与された。2月には、上唇と右口角にヘルペスができ皮膚科でソラビックスという抗ヘルペスウイルス外用薬を処方され、完全に治癒するまでに約1か月を要した。皮膚科医の話では風邪が影響しているとのことであった。

3月23日、39.5℃の高熱と右足首周辺の激痛のため午前5時、病院の救急外来を受診。血液検査の結果、炎症の指標であるCRP=13.78（正常値=0.5以下）と異常に高く、蜂窩織炎の3回目の発症となり11日間入院した。朝夕100mlの抗生剤点滴の世話になった。蜂窩織炎は3回目ともなると、ひつこくて最初の抗生剤（パンスポリン）をしばらく続けたが効果が出ないために別の抗生剤（メロペン）に切り替えられた。2、3日後、パンパンに腫れ水嚢で冷やしていた患部の腫れがようやくひき始め、痛みも和らいできた。私が最初に蜂窩織炎に罹患したのは平成15年8月である。本誌第37号に詳しく書かせて頂いた。第2回目が平成18年8月である。今回が第3回目ですべて同じ場所が腫れてきた。

同じ場所のどこかに蜂窩織炎の残留バイ菌が潜んでいるのであろうか？また、3回とも温泉に浸かった後に発症しているので、右足に傷がある時は温泉に入らないように今後注意しなければと思っている。

さらに6月下旬になって、めまいがひどくなったため、MRA (Magnetic Resonance Angiography) と MRI (Magnetic Resonance Imaging) 検査を行うことになった。昭和30~40年頃は脳血管のX線写真を撮ろうとすると頸動脈あるいは椎骨動脈から注射器でヨード製剤などの造影剤を一気に注入して瞬間的にX線撮影をしたものである。患者さんは検査後しばらく頭が痛くて苦しんだそう。最近の画像診断技術の発展は目覚ましく、磁気共鳴装置という大きな、強力な磁石の中に20分ほど寝ているだけでMRAにより脳血管がはっきりと画像化され、脳の中の血管走行の様子から病気が診断されるようになった。また、同じ装置でMRIにより脳実質の様子も精細に画像化されるので画期的な画像診断技術の進歩といってよい。全く苦痛を伴うことなく検査が受けられることがなによりも良い。私の検査結果も幸い脳梗塞あるいは脳動脈瘤の病巣はないとのことであった。しかし、メニエール病の疑いありとのことでメリスロン錠が処方された。この薬は、蝸牛管血流量を増加させたり、脳内血流量の改善に効果を発揮するらしい。しばらくこの薬を朝、昼、晩服用して様子見となったが、7月中旬頃にはめまいの症状は消えていった。

本「健康文化」誌の毎号に私の病気の体験談を寄稿してきたが、今年はまだ半年を過ぎたばかりであるのに例年になく色々な病気が襲ってきた。まさに後期高齢者真近で体力が劣っているからであろうか。「神様！今年はもうこのくらいで勘弁して下さい」と心の中で祈っているところである。

さて、今回のクラス会の目玉として、同級生のA君が経営する工場見学を企画した。A君は愛工を卒業して以来55年になるが、20年前に二代目として代表取締役社長となり、事業を拡大しながら現在に至っている。平成20年に創業70周年を迎え、名鉄犬山ホテルで盛大な記念式典を挙行している。現在は愛知県、岐阜県、岡山県に6工場を、アメリカのケンタッキー州リッチモンドに1工場を有する大実業家である。今回は、岐阜県美濃市にあるテクノパーク工場を見学させてもらうことにしている。工場の様子など見学した感想は本稿には間に合わないが、会社のパンフレットによると、自動車のベアリングやギアの生産が主体のようである。等速ジョイント、ベアリング及びハブユニットなどを中心にプレス鍛造、熱間ローリング鍛造、冷間ローリング鍛造など鍛造(月間2,500t)熱処理(月間1,200t)の生産を誇る岐阜工場、などと工場ごとの製品と生

産量が記載されている。最近ハイブリッド車が台頭してきたので、通常のガソリン車関連の部品工場は、生産部品の変更を余儀なくされる工場も多々あるかと思われるが、ベアリングやギアは車種変更にあまり影響されない部品と思われるので A 君の先見の明に感心したところである。とはいえ、これらの製品の内容については、同じ愛工で学んだ同級生である私には殆んど理解できないものばかりである。ここまでに至るには研究に研究を重ね日夜努力されてきたのであろうと、ただただ敬服するばかりである。また、各工場とも、合理化・省力化・省人化に努めているとも書かれているが、1工場の従業員数は200~300人は要しているものと思われる。これらの従業員の家族を含めると6工場では2,000人近くを養っていることになるのであろうか？あるいは、もっと多くの人たちが関わっているに違いない。大したものである。私などは女房1人を養うのに精いっぱいであるのに…いや、今となっては女房に養ってもらっているのかも知れない。実際に工場見学をしてみるともっとびっくりすることが多く見られることであろう。楽しみである。

わがクラスメイトは工業高校の卒業生だけあって、この A 君の他、段ボールを製造する機械を開発して社長・会長まで登りつめた B 君、自家発電装置など大型の装置を東京、大阪、名古屋などの大都市の大きなビルや病院に設置したりする会社の社長を現在も続けている C 君、D 君は名古屋市周辺の衛星都市で上下水道を敷設する会社を経営し、大型掘削機を十数台も保有しているという社長である。などなど、他にも社長、工場長経験者が何人も居る。

74歳のお爺さんばかりのクラス会であるが、半世紀以上昔の高校生に戻り、歩んできた長い人生を語り合うのもまた楽しいものがある。

残念なことに、この愛工も少子化の波には勝てず、向こう5~6年？のうちには県立東山工高に併合される運命にあるといわれている。現在は名古屋市の北のはずれ北区福德町に位置しており交通の便が悪いためなのか、地下鉄東山線が利用できる東山工高が生き延びることになったのかも知れない。「湧き上がる泉よりもなほさはやかに清新あふれ…」という校歌は少なくとも消えてしまわないように口ずさんでいきたいと思う。

今年のクラス会は、A君の工場見学の後、下呂温泉につかって卒業後55年の汗を落とすことにしている。来年のクラス会幹事長には母校“愛工”の見学会を企画してもらうことにしよう。(’09.7.31.記)

(名古屋大学名誉教授)